

## 吉田文化会館だより

第141号 前編

人権を考えるつどい

竹内昌彦さん 講演録

「私の歩んだ道」見えな  
いから見えたもの」

2月17日に開催した笠

岡市人権文化祭での 講演  
会の一部をご紹介します。

おいたち

私は、昭和20年2月に中国の天津で生まれ終戦を迎えました。生まれたときは元気でしたが、日本へ帰る引き揚げ船で肺炎をわずらいました。栄養もなく薬もない中でよく生きて帰ってこれたと思うのですが、それが原因で両目の視力が弱くなったんです。でも、左目は少し見えていたので、わずかな視力を頼りに地元の小学校へ通いましたが、8歳の時に網膜剥離で完全に見えなくなりました。

小学2年生

小学2年生の担任はいい先生で、最初の日にクラスの皆にこう言いました。「竹内君は病氣

が原因で目がよく見えない。竹内君が黒板を見るにはどの席がいいかな？」すると、「先生、一番前がいいと思います」と、みんなが私の席を決めてくれました。さらに、黒板に字を書いた後に「竹内、この大きさを読めるか」と字が見えているか確認してくれて、よく見えない私をどうすれば助けることができるかを、クラスの皆が考える雰囲気を作ってくれました。ある日、隣の席の女子が私にノートを見せて、字を教えてくれました。それを見た先生は、「優しい子じゃ」とすぐ褒めたんです。すると授業が終わって3人も4人も私のところに来て、「僕のノートを見てみ」と競うように私の役に立とうとしてくれました。先生は、クラスの皆に「人として何が大切な、何が正義か」を教えていたのです。

パラリンピック出場

昭和39年、私が19歳の時に東京オリンピック・パラリンピックがあつて、視覚障がい者卓球で金メダルをとることができました。東京へ向かう岡山駅には、大勢の人が見送りに来てく

れて、「竹内、頑張れよ」と励ましてくれました。その中に父と母もいました。父はおとなしく無口な人ですが、電車が動き出したその時に、デッキに立っている私に向かって「竹内昌彦 バンザイ」と声を張り上げて3回も叫んだのです。私はびっくりしましたが、父の思いが痛いほどわかりました。わずかに8歳で目が見えなくなった息子を、腕によりをかけて鍛えてきた。その息子が自分よりはるかに大きくなって、大勢の人に見送られて東京へ出発していく。あの場面は、重い障がいを背負った我が子を育てあげた父親の「勝利宣言」のバンザイだったんです。「父さん、ありがとう」とつぶやくと涙があふれました。それから父と母を安心させよう、喜ばせようと心に誓い、それが生きていく上で大きな支えであったことは確かです。

2つのお願い

皆さんに2つのお願いがあります。1つ目は、「点字ブロック」の上に自転車などを置かないでください。私たちは、あのデコボコを足の裏で感じて歩く

ので、点字ブロックがあると安心できます。ですから、点字ブロックの上に物があると、とても困るんです。

2つ目は、目が不自由な人と話すときは声を出してください。声が聞こえるのはとても嬉しいんですよ。黙ってうなずいても全然見えませんからね。それと、困っている人を見かけたら「何かお手伝いすることはありますか」と声をかけてもらえるとありがたいですね。

私の使命

私は、定年退職後に「一人ぐらい、外国の目の見えない人を支援する日本人がいてもいい」と考えて、モンゴルとキルギスに盲学校を作りました。学校で子どもたちと関わる中、生徒の中に手術をすれば目が治る子どもがいることを知ったのです。目が治るって、なんて明るい希望に満ちたことでしょう。そこで、手術費用を集めるために「ヒカリカナタ基金」を立ち上げました。心の優しい人から預かった善意のお金を基金に積み立て、モンゴル、キルギスのほか、ミャンマー、カンボジア、ベト

ナムで、786人の子どもに光を届けました。目が治った子どもはケロッツとしています。親は涙を流して私を拝むようにして喜んでくれました。

そこで、今考えているのは、見えるようになった子どもに絵を描いてもらい、その絵を社長室に飾ってもらうんです。飾るだけでなくレンタル料をいただいて、それを元手に次の子どもを目を治す循環型のシステムを広げようと思っています。まずは、1000人の子どもの目を治すことが目標です。私も、やがてはあの世に行くことになりました。でも、その時には、重度の障がいを持って生まれ、7歳で先に逝った息子から「お父ちゃん、いいことをしてきたね」って褒めてもらいたいと思っています。



# 吉田文化会館だより

第141号後半  
2024年7月

令和6年度 笠岡市平和祭

「紛争地、被災地に生きる人々の声～取材から見えてきたこと～」

認定NPO法人 Dialogue for People 副代表／フォトジャーナリスト

TBS テレビ「サンデーモーニング」コメンテーター 安田 菜津紀さん 講演会（要申込）

日時 令和6年8月4日(日) 14:00～15:30 (13:30 開場)

場所 保健センター



報道されない世界の「今」

2023年10月7日、パレスチナ・ガザ地区を事実上実効支配するハマスからイスラエル領内への攻撃が行われ、その後イスラエル軍によるガザ地区への大規模攻撃へと展開し8カ月以上が経過しました。ガザ地区内での死者は4万人にのぼります。しかしながら、私たちが普段目にする報道はどうでしょう。時間が経つにつれて、戦争や紛争のニュースは数字に代わっていきます。ガザとはどんな地域なのか。パレスチナ問題の根本は何なのか。多くの一般市民や乳児すら爆撃の対象となり、命が奪われている現実を私たちはどこまで理解できているでしょうか。

菜津紀さんは、世界の紛争地や災害の現地を取材し、TBSテレビ「サンデーモーニング」のコメンテーターや自身のホームページなどで、日々の報道では取り上げられることが少ない人たちの声を伝えています。

講演では、取材で撮影された写真と共に、私たちに今何ができているのか、どんな未来を選んでいるのかについてお話いただきます。

世界の「無関心」を「関心」に

この度のイスラエル軍とハマスの戦闘の時も、安田さんはすぐに現地へ向かい取材しました。インターネットなどで世界の情報を得ることができる時代だからこそ、安田さんは「日本と現地でどんな情報や感覚の開きがあるのか、それを肌で感じ、持ち帰る」ことで、遠い地との心の距離が縮まっていくのではないかと考えています。

また、安田さんの丁寧なコミュニケーションを重ねた取材から伝わる世界の声は、私たちの心に響き、胸に迫るものがあります。

「（シリアのワシヨカ二国内避難民キャンプ）取材中、キャンプで生活する一人の男性が、まっすぐに私に語りかけてきた。『私たちの置かれた状況は、なぜウクライナほどの関心を集めないのでしょうか？信じる宗教が違うからでしょうか？私たちの目の色がヨーロッパの人々のそれとは違うからなのではないでしょうか？』それは、日本社会にも投げかけられた言葉だろう。」（引用…安田菜津紀「隣人のあなた「移民社会」日本では

ま起きていること」、岩波書店、2022年11月、6ページ）

写真と共に伝えられる言葉からは、自分たちの世代だけではなく、未来を生きる人たちのために何ができるか、という課題に真摯に向き合う安田さんの強い思いが伝わってきます。

いまなお続く、ロシアによるウクライナ侵攻やシリア内戦など、世界中で戦禍が絶えません。私たちはこの大きな問題とどう向き合うか。支援のあり方とはどうあるべきか。安田さんの情熱や視点に触れることで、より世界への理解が深まる講演です。

多くの皆さんの参加をお待ちしています。

**申込** 氏名、住所、連絡先を電話、FAX、市ホームページのいずれかで申込

**締切** 7月29日(月)

**申込・問合せ** 人権推進課

☎(69) 2120

☎(62) 5767

ID 57308



人権 まんが 未来ちゃん 第65回 カスタマーハラスメント 作画 南一平



人権まんが解説

セクハラやパワハラの認知度は上がり、多くの事業所で対策が取られています。近年、飲食店や小売店などで、お客が店員に対して理不尽な要求や過大なクレームをつける「カスタマーハラスメント」いわゆるカスハラが発生しています。

ある自治体では、来庁者が職員への対応にクレームをつけ、職員の名札をスマホで撮影し、「顔と名前をSNSにさらす」と脅した事例がありました。このため、多くの自治体では職員の安全を守るため、着用する名札の標記を氏名から苗字のみに切り替えています。

民間では、大手の鉄道会社や航空会社をはじめ多くの事業者が、社員の安全・安心を守るため「カスタマーハラスメントに対する方針」を定め、毅然とした対応をとることにしています。

カスハラは、仕事へのモチベーションが低下したり、精神疾患になるなど深刻な影響を及ぼす危険性があります。社員の安全を守り、安心して仕事ができる環境を整えるためにも、サービスを提供する側と受ける側のお互いが認め合い、尊重し合える社会の実現を目指していきましょう。

問合せ 吉田文化会館  
☎(65)1069 ID57434